

主題：視覚障害者女性の「自分で化粧したい」を支える家族支援の事例研究  
ー先天性全盲者による「ブラインドメイク・プログラム」参加の意義からー

○ 日本福祉大学大学院社会福祉学研究科 氏名 大石 華法 (8687)

キーワード：視覚障害者、ブラインドメイク、家族支援

### 1. 研究目的

本研究では、化粧経験のない先天性全盲者の女性が「自分で化粧したい」との自立意欲から「ブラインドメイク・プログラム」へ参加し、自分で化粧できるようになる過程における当事者の変化とその家族による支援内容を、インタビュー調査を通して明らかにし、当事者の化粧の可能性とそれを支える家族による支援について考察することを目的とした。

### 2. 研究の視点および方法

近年、化粧は外見を装うものだけではなく、社会人女性としての「身だしなみ」と言われるようになってきている。このような化粧社会のなかで、化粧したくても出来ない視覚障害者の女性は、顔にコンプレックスを持つことも含め、外出・社交意欲の低下から社会性の低下に繋がっている。

2010年に大石が、視覚障害者が自分自身で化粧（フルメーキャップ）することができる化粧技法を考案したことから、視覚障害者が化粧に関心を持ち始めた。

現在、大阪のみで開催されている「ブラインドメイク・プログラム」に参加するには、遠方在住の視覚障害者にとって、精神的な支援から、移送に伴う物理的な支援まで幅広くなる。

本研究では、発表者が視覚障害者女性にブラインドメイクの化粧指導を行う化粧訓練士の立場から、先天性全盲者の女性を対象に、自分で化粧できるようになる過程における当事者の変化とその家族による支援内容を、ブラインドメイク・プログラムによる介入を通して把握するものである。

本研究の方法は、先天性全盲（視覚障害者1級）50歳代の女性と、その家族（視覚障害者3級：夫60歳代・弱視：娘30歳代）を対象者とし、当事者がブラインドメイク・プログラムに参加して修了するまでのプロセスから、家族による支援に注目し、ブラインドメイク・プログラムのレッスン後日に聞き取りを行い考察した。これまで100名程度のプログラム参加者を対象とした調査を実施してきた経験をもつが、そのうち先天性全盲のケースは3ケースにとどまり、家族に対して調査が実現したのは、本ケースの1事例である。

### 3. 倫理的配慮

本研究における対象者であるA県在住のM氏とその家族（夫、娘）には、日本社会福祉学会の研究倫理指針に基づいた配慮を行い、本研究内容・方法・目的を十分に説明して承諾を得ている。

#### 4. 研究結果

ブラインドメイク・プログラム参加から下記の合計4回（20時間）の実習指導を実施した。

【第1回】2014年9月21日：洗顔、化粧水、乳液、ファンデーション

M氏：長く憧れていた化粧できることに喜びを感じた。家族の理解と協力に感謝している。

夫：費用が負担になるが、妻が以前からしたいことであったため見守っていきたい。

娘：大阪まで付き添うことに面倒だと感じていたが、母が大阪に来る時に同行したい。

【第2回】2014年11月4日：パウダーファンデーション、ビューラー、マスカラ

M氏：娘に頼んで三面鏡を購入した。夫にアイシャドーをクリスマスプレゼントしてもらった。

夫：目が見えなくても化粧や鏡は女性にとって大切なものだと理解している。

娘：母のために三面鏡を選んだ。毎日楽しそうに化粧の練習をしているので嬉しく思う。

【第3回】2015年2月7日 アイシャドー、アイブロー、チーク

M氏：周囲から「化粧しているの」「綺麗になったね」という声が嬉しい。

夫：口紅がはみ出さずに塗れているので褒めた。妻と外出する機会が増えた。

娘：父が「お母さん綺麗になった」と言って、二人で外出する機会が増えた。

【第4回】2015年5月3日 ブラインドメイク・プログラム修了

M氏：夫や娘から「綺麗に化粧している」と言われるようになって、とても嬉しい。

夫：妻が化粧をして綺麗になったので嬉しい。これからも妻をもっと大切にしていきたい。

娘：化粧が綺麗にできるようになった母を見て、同じ女性として尊敬できた。

#### 5. 考察

以上の結果から、M氏本人の変化とそれを支える家族支援について考察を加える。

本人の変化については、「長く憧れていた化粧できることに喜びを感じた。家族の理解と協力に感謝している。」との表現をはじめ、自分で化粧することができるようになると、「夫や娘から『綺麗に化粧している』と言われるようになって、とても嬉しい。」に至っている。

家族による支援については、M氏が先天性全盲に対する家族の支援体制が日常的に出来上がっていると考えられる。M氏が先天性全盲の視覚障害者であるという特別な障害者扱いではなく、家族内での相互扶助関係がごく自然に、家族としての長い時間の中で築き上げられてきている。

本研究では、M氏の家族支援の1事例の考察に過ぎないが、先天性全盲者によるプログラムへの参加の可能性を条件づける家族による支援の要素、継続意思の支援と本人変化への尊重、移動支援、相互作用的な扶助関係の形成を抽出できたと考えられる。